

■読みに困難のある子どもたちへの実践事例

読みの困難を抱えた児童への読書活動での活用⑤

―「読む喜び」を広げる読書環境を目指して②

松江市立意東小学校

井上 賞子

研究目的

読みに困難のある子どもたちに対し、音声の補助がある読書環境を整えることで、読書から得られた情報を活用して学習場面に生かしていく体験につなげていく。

活用実態

○昨年度取り組み概要

<わいわい文庫活用時の問題点>

- ドライブのない端末で見るためには、あらかじめデータを端末に入れておくことが必要になります。
- 書影ポスターで読みたいものを決めても、そのデータをたくさんのデータから探し出してインストールするのにいくつもの行程が必要で、なかなか子どもだけでは困難です。

※「読みたい」→「読めた」が子どもだけで完結しない状況は、読書を「日常的に楽しむ」ことにつながりません。

<改善への試み>

- ①書影ポスターから本を選びやすくする

- ポスターに、CDごとにナンバリングしたシールを貼り、ラミネートします。
- 番号のシールを貼ったポスターの閲覧台を作成し、本を探しやすくします。



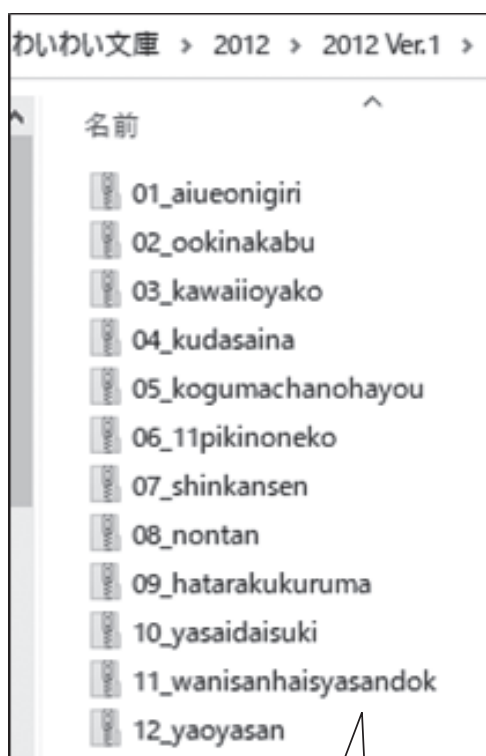
CDごとに書影に番号シールを貼ります。

Ex.)2016、ver.2、④

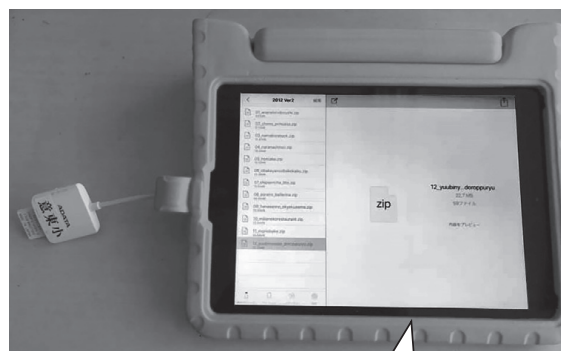


②選んだ図書へのアクセスをしやすくする

- データを圧縮し、書影ポスターにつけたナンバーを割りあてます。
- 「年度 → Ver → 書影番号」を階層にしたデータを作成し、だれでも閲覧できるブルー版とそれ以外に分けてSDカードに入れます。
- ドキュメントファイルのデータをやりとりできるカードリーダーを購入し、閲覧用のiPadにSDカードを読み込むアプリをインストールします。



圧縮したデータに番号をつけて
階層にしたところ
Ex.)2012→ver.1→データ



iPadに読み込んでいるところ

③ 活用場面の広がりを目指して

- データの入ったSDカードとカードリーダーをセットにして複数準備し、対象となる子どもがいる学級の端末でいつでも利用できるようにしました。
- 誰でも閲覧できるブルー版とカードを分けることで、学級全体への読み聞かせなどの場面での活用をしやすくしました。



○今年度の実践

カードリーダーセットを常時貸し出している知的障害特別支援学級での実践から、4年生のAさんについての報告です。

① 3年時までのAさんの読書の状況

- 絵本は好きで入学前からよく手にして、おもに絵を楽しんでいました。
- 文字の習得後もスムーズに読むことには苦手さが大きく、繰り返し音読している教科書でも、「いま読んでいる場所がわからなくなる」「ことばの区切りがわからなくなる」という状況が見られました。
- 表紙を見て「読みたい」と絵本を手にとって、初見では上記の状況がさらに顕著になるため、一人で読み切ることがむずかしく、途中であきらめてしまう姿が見られました。そのため、「文字の少ない本」「よく知っているシリーズの本」を繰り返し選択していました。
- 黙読では、よりどこを読んでいるのかわからなくなるため、教科書以外のものを読む場合も、小さな声で音読しています。
- 読み聞かせは好きですが、読んでもらうのを聞きながら文字を目で追っていくことはむずかしい様子でした。

② わいわい文庫を導入して

- 読み上げを聞きながら、かぶせるように音読している姿が見られました。
- 音の情報があるため、読み間違えたり言葉の区切りを間違えてしまったりしても、その場で修正して読み進めていくことができました。
- ハイライト（ガイド）があるため、

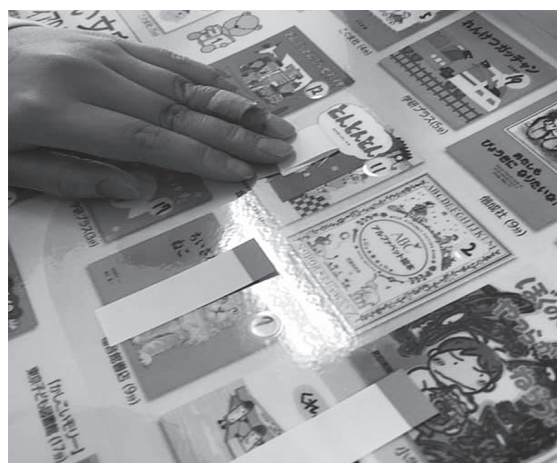
「いま読んでいるところ」を見失うことなく読むことができます。



閲覧台でポスターを見比べながら読みたい本を探している様子



読みたい本に付箋が貼ってある様子



本のタイトルを確認している様子

- 当初は、読み上げのスピードを最初の設定より遅くして読んでいましたが、少しずつ速くして、現在は最初の設定のスピードで読むことができます。
- 自分で音量を調整し、音を最初の頃よりは小さくして、ハイライトを手がかりに自分で読んでいく姿が見られました。
- 日常的に閲覧台のポスターを何度もめくりながら読みたい本を探し、「これも読みたい」と多くの書影に「読みたい本」の付箋を貼っておき、読み終わっては次の本と、読み進めていくことができています。



選んだ本のデータをiPadで再生して読んでいる様子

③ 考察

- わいわい文庫での読書を体験して以降、同じ本を繰り返し手に取っていたAさんが、「これも読んでみたい」といろいろな本に興味を示して、一人でも読書を楽しめるようになってきてい

ます。

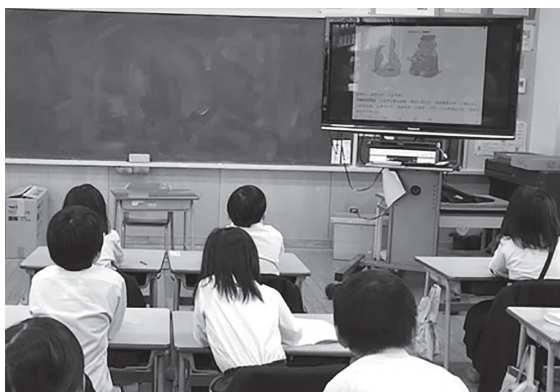
- そこには、「音があれば読み切ることができる。内容を一人で楽しむことができる」という見通しを持てたことが大きく影響していると思われます。
- スピードや音量の調節など、その時点での「自分の読みやすさ」に合わせることができたことも、Aさんにとっては「すごく頑張る」ことを前提としない読書環境につながったと考えられます。
- スピードを少しずつ速く、音量を少しずつ小さくしていった様子からは、「読むこと」を日常的に楽しむ中で、Aさんのペースで読みのなめらかさが向上していったことが推察されました。
- Aさんに感想を聞くと、「読んでくれるからわかりやすい」「黄色いところ（ハイライト）があるから、どこを読んでいるのかわかるのが便利」と答えており、読み上げとハイライトが、自分が読書を楽しむうえで大切だということを自覚している様子も見られました。

○取り組みを振り返って

昨年度までは報告者が担任をしている自閉症・情緒障害特別支援学級の児童へのわいわい文庫の活用を行ってきました。その経験から、音の補助と視

覚へのガイドとなるハイライト表示があるこの文庫が、読みに困難がある子どもたちの助けになることは容易に想像できましたが、データへのアクセスのむずかしさからなかなか校内への広がりにつながりにくい状況がありました。昨年度からの取り組みで、すぐにデータにアクセスできるようにしたことで、これまでより活用へのハードルが低くなったと感じています。

今回は、知的障害特別支援学級での実践を取り上げましたが、対象を限定しないブルー版を全員への読み聞かせで活用することで、通常学級でも、わいわい文庫の良さや操作の方法についても触れる機会が増えていきます。



通常学級での読み聞かせの様子

来年度に向けて

現在の「教室に1台ある担任が管理しているiPadを借りて使う」状況では、データへのアクセス状況を改善しても、複数の対象児童がいる通常学級ではなかなか必要な子どもたちが「いつでも

読みたいときに読める」につなげることは困難です。

今年度末までに一人1台端末の導入が計画されており、そうなれば「自分の端末」に読みたい本を入れておくことで、より日常的に読書を楽しむことができます。

それに合わせて、紙の本同様に図書委員会が貸し出しの手続きを行えるようにすることで、「学校図書館で読みたいものを借りて、いつでも読書を楽しむことができる」状況と「紙の本同様に借りた冊数として評価される」環境を作ることを目指しています。

※わいわい文庫の活用も含めての「読むことに困難がある子」も活用できる学校図書館パンフレットを2019年度末に作成しました。下のQRコードからダウンロードできます。



http://www.pef.or.jp/school/grant/school_photo/20200331_01/?utm_source=0401&utm_medium=itou&utm_campaign=45th